

障害児虐待における家族支援に関する研究

山崎 陽史

本研究は、今日的な障害児虐待の現状と支援状況について明らかにし、未だ充足しているとは言えない家族支援施策の検討、障害児虐待に関する地域支援体制の検討を行ったものである。

障害児虐待とは、養育者・家族によって適切な養育や保護が行われない状態 (maltreatment) である。そこで、実態把握を目的として、東北6県の児童相談所 (支所含む28か所) を対象に質問紙調査を行った。その結果、回答のあった児童相談所 (有効回答率60.0%) で扱った児童虐待相談件数の5.4%が障害児虐待ケースであったことが明らかになった。調査で明らかになった現状は、まず大きな問題として「障害児虐待」に関しての認識が低いことである。また障害児虐待における家族支援体制としては、①行政機関などの支援体制は整いつつあるが民間団体など行政以外の社会資源については体制整備に課題がある、②支援することが可能な機関・団体が点在しているが、連携的な関係を築いているとは限らない、③障害児虐待に対して特別な対応施策を取っている機関が少ないことなどが明らかになった。また、支援における問題として、子どもの障害についての理解や児童虐待全般の問題でもある「孤立」がある。障害の理解については、軽度の知的障害や広汎性発達障害などの軽度発達障害について理解の低さが指摘された。「孤立」では社会的・対人関係の影響などが理由に挙げられ、障害児をもつことにより地域で生活することへの困難さを感じている状況であることが指摘された。

以上のような結果を踏まえ、家族支援施策は、「虐待」や「障害」といった一方向的な視点では捉えることができず、医療や保健、教育、福祉などさまざまな視点で捉えることによって「障害児虐待」の本質に迫ることができ、またそのうえで支援を行うことができるようになる。そこで、現状の児童虐待に対する支援モデル・援助モデルを障害児虐待に当てはめることができるのかについては疑問が残る。必ずしも適用できないとは言いつても、障害児虐待を対象とした支援モデル・援助モデルの検討が必要である。

【臨床心理系】

死産・早期新生児死亡による親の悲哀過程

太田 詔子

子供を死産、新生児死で亡くした親は、かわいい我が子の誕生が一転し、悲しみへと突き落とされるような経験をする。また、周囲の者から、産まれた子どもを「なかったこと」にされる場合も多い。そのような中で、悲哀過程の滞り、悲嘆の表出が抑圧されると、抑うつ・長期化や悲嘆の遷延、家族関係の葛藤を引き起こし、長期にわたって家族に影を落とすことが指摘されている(永田, 1999)。

日本において、死産や早期新生児死亡を経験した親に関する研究はこれまで多くされてこなかった。近年、遺族の体験記や自助グループの報告書等注目すべき文献等が出始めてきており、徐々にそのような経験をされた方々の声が広まりつつある。しかし、その中でも、母親に焦点をあてたものが多く、父親に関しての研究

はほとんどない。筆者は実際に自助グループに参加させていただいたのだが、やはり父親の参加は少なく、参加していても、母親が終始悲しみにくれているそばで、淡々と事実を語る父親、母親と同じ様に涙ながらに語る父親と様々である。また参加者の中には、夫の対応やこれまでの関係性に不満を抱く母親もいた。

そこで本研究では、悲哀の過程は、母親、父親共にたどるものであるのは明らかであるが、夫婦間でその状態に違いがみられるのであろうか。そこで本研究では、悲哀の過程で見られる父親と母親それぞれの悲嘆反応の違いを明らかにし、子どもの死別時からの妻/夫に対する、行動・感情の変化について明らかにすることを目的とした。

結果として、母親の悲嘆反応は「ショック」「否認・現実感の無さ」「悲しみ・泣く」「罪責感・後悔」「抑うつ感」「他者への怒り」「身体的症状」がみられ、父親は「ショック」「否認・現実感の無さ」「悲しみ・泣く」「怒り」「無力感・孤独感」「悔しさ」「恐怖感」がみられた。

Ambiguous Function Assignments の効果とその関連要因について

金野小都子

本研究の目的は、AFASを実施・インタビューを行い、実施前後でどのような違い (効果) がみられるか、及びその違いを左右する要因は何かについて、後に成される意味づけとの関連から探ることであった。またその要因としてAFASを実施する前の動機づけやAFASへの期待度、解決像が具体的である程度を想定していた。

今回20名の大学生を対象として実験を行った結果、動機づけが高く解決像が曖昧である対象者ほど、課題実行中に自身の内面に注目するという内省的プロセスを経て問題の捉え方や問題に対する態度といった変化を体験し、そのような実感をもった自身の体験でもって課題を意味づける傾向にあることが示された。つまり、曖昧な課題から積極的に意味を見出そうとするため、よりAFASが機能しやすいということである。これは、これまでの動機づけが高く解決像が明確である対象者にAFASを用いると有効である、という従来の指摘とは異なる結果が得られたことになる。またそのような対象者は「将来の目標や自分のしたいことが明確になる」「落ち込むことが少なくなる」等、意欲の面においてより効果が得られやすいことが示された。

更にそういった意味づけが行われないパターンにおける意味づけ阻害要因としては、「義務的・客観的」という課題への取り組み態度が示唆された。動機づけが低く、既に解決像が具体的である対象者はそのような姿勢で課題に取り組みがちであり、自身の内面に目を向け課題を自身に引き付けての意味づけが行われにくいと考えられる。

今回の実験では、対象者が面接場面にもってくる困り事の内容に、あまりにも現実的な内容のものが散見されている。そういった類の悩み事の場合、答えやそこに辿り着く手段が明確であるため、改めてAFASに意味を見出そうとする気持ちが起こりづらかったのかもかもしれない。そういった意味において、今回の結果が